福岡市における腸管出血性大腸菌（0157 等）の薬剤耐性の推移

保健科学課　岩佐　奈津美・本田　己喜子

第 63 回福岡県公衆衛生学会

腸管出血性大腸菌（EHEC）感染症は，重症例では意識障害や溶血性尿毒症症候群（HUS）を発症し死亡に至る場合もある. 福岡市では, 毎年 50 件前後の EHEC による感染事例が発生しているが, その薬剤耐性状況を調べた例がないため, 今回，平成 17 年度から平成 26 年度までに当所へ搬送及び当所で検出された EHEC 陽性株計 932 株に対し，14 種類の薬剤（ABPC，CET，CTM，CAZ，CTX，CEPM，NFLX，TC，SM，KM，CP，FOM，IPM，MEPM）を用い薬剤耐性状況を調査した.

EHEC 全体としては 36.8%が薬剤耐性を獲得しており，特に O111 は 95.7%と耐性獲得率が高く，次に O26 が 45.8%となっていた．薬剤別では，ABPC，TC，SM においてそれぞれ 15.8%，27.4%，30.7%と耐性率が高かった.
ESBL 産生菌が O157（TEM,CTX-M-15），O26（CTX-M-15），O153（CTX-M2G）で 1 株ずつ検出され，FOM 耐性菌が O91 で 1 株検出された.

FOM 耐性，ESBL 産生遺伝子はプラスミド上に存在し，同じ大腸菌はもちろんのこと，腸内細菌科の異なる菌種間でも伝達される可能性があり, 院内感染などの起炎菌となりうる可能性が考えられ, 今後の耐性菌の検出状況に注意が必要である.